

通知票に関する調査研究

—— 形式・内容・表記を中心に ——

巻町立巻中学校 石 田 誠太郎

I 主題設定の理由ならびに研究のねらい

最近、通知票改善の動きが全国的な様相を呈している。特に本年2月、文部政務次官の「通知票のつけ方は各学校の自由である」との発言以来、各地で新形式、新内容の考案が発表されている。このような気運の背景には次のことが考えられる。

- 教育爆発時代と言われる現在、進学者の急増や父兄の教育への関心の上昇につれ、旧来の通知票に対する不満、とくに子どもの努力の結果があらわれにくい評価方法への改善要求が強い。
- 学校としても各学校独自の見解で通知票を作成するものの、通知票の性格をどのように考えるのか、通知票でどのような教育効果をどの程度期待しようとするのかを明らかにせず、指導要録記入時の、あるいは高校入試の際に作成する調査書記入の便宜を考えて通知票の形式、内容を定めていた感じがする。
- 能力開発がさげばれ、ひとりひとりの個性、能力を最大限発揮させようとする日常の教育活動と通知票との間に大きな断層があるのではないか。知的側面の重視、テストの成績によって人間の価値決定をさせている通知票に対する批判も考えられる。

このような背景にあって、一たび通知票がマスコミで問題にされると父兄の通知票の改善要求は高まり、学校としても種々の視点から検討を加えるようになったものと考えられる。

従来、通知票の意義として、

(1) 学校における学習、行動の状況を定期的に連絡し、父兄に対して子どもの今後の指導の参考に供する。

(2) 学習、行動について知らせ、本人自身を激励し、反省を促す。(小学館、教育事典)などがあげられているが、通知票の意義をより効果あらしめるためには、父兄にわかりやすく、理解される形式・内容・表記でなければならない。また、児童生徒にも日常の学習方法や行動に示唆を与え向上心を喚起させるものでなければならない。このような見地から真に意義があり、生徒の成長に貢献する望ましい通知票は、どんな形式で、どんな内容を、どのように表わしたらよいかを解明する手がかりとなる資料を作成し、通知票改善に役立てたい。

II 調査研究の内容、方法

1 通知票の形式・内容・表記の調査

- (1) 学習記録欄の形式
- (2) 学習評価の方法
- (3) 学習所見の項目と記入回数
- (4) 行動性格の記録欄
- (5) 特別教育活動欄の記録
- (6) 通知票と定期考査素点通知

県内各郡市の中学校から無作為に2校ずつと、西蒲原郡全中学校から通知票の送付をお願いし、あわせて、各学校でとくにふうしている事項について書きそえてもらった。(53校回収)回収した通知票を上記の項目から分析検討を加えた。

2 生徒，父兄の通知票に対する意識調査

通知票に対する父兄の要望や現在使用している本校の通知票をどう受けとめているかを調査し、調査結果は通知票の形式・内容・表記の考察の際資料として引用した。

(調査数……本校生徒600名，本校父兄200名)

Ⅲ 調査結果と考察

1 学習記録欄の形式

53校の通知票の学習記録欄の形式を大別すると、次のA B C Dの4種類に分けられる。

A形式

教科 観点	学期 区分		I	
			所見	評定
国語	○○○○○			
	○○○○○			

B形式(考査素点併記)

	国語		総計	順位
中間				
期末				
評定				

C形式(評定のみ)

教科	国語	社会	数学	理科
学期 I				
II				
学年				

D形式(各教科ごとに作成し9教科で9枚ある)

選択したテストの結果			
	中間	期末	
選択段階			
得点			
成績	下中上	下中上	
項目			
○○○○○			
○○○○○			
○○○○○			
年間の総合成績の評定			
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10			

- ・ A形式……32校
- ・ B形式……6校
- ・ C形式……8校
- ・ D形式……1校
- ・ その他……6校

A形式が32校と圧倒的に多く、指導要録の形式に準拠している傾向がうかがわれる。指導要録記入時の簡略、教師の労力節減という発想が潜在的にあるのではないかと察せられる。しかし、この形式の中にも内容の点で最近検討が加えられている。(後述)

BC形式はA形式から所見欄を削除して、更に教師の事務軽減という方向で作成されたものである。

D形式(伝票形式)は各教科ごとに作成したもので能力に応じたテストを選択、受験させ、その段階における成績を通知し、あわせて、観点も生徒の目標となるような項目を設定してあり日常の学習方法に示唆を与え向上心を喚起させようとのくふうがこらされている。しかし、どの形式がよく、どれが好ましくないという結論は、本調査から軽々に断じがたい。すなわち、通知票を指導の結果の連絡と考えるか、指導の一つの手段と考えるか、それぞれの学校によって異なるからである。また、PTAのあり方、教師と父兄の接触の度合いや生徒に対しての個人指導の程度等によって異なってくる。C形式をとっている学校でも日々の指導が個々の生徒の能力を高めるよう配慮され、父兄と密接な連携をもっているならば、他の詳細な形式をとっている学校より生徒の向上心を喚起し教育効果を高めているかも知れないからである。

2. 学習評価の方法

5段階評価	5 4 3 2 1 で	26校
	5° 5× 4上 4中など…	6校
10段階評価	正常分配曲線により…	14校
	各段階10%くぎり…	4校
	各段階人数制限せず…	2校
偏差値による換算点		1校

(1) 5段階評価から10段階評価の方向へかわっている傾向がある。

通知票改善要求の直接的な契機は、この学習評価の表わし方への不満であった。5段階評価では一つの段階の中においての幅が多く、生徒の学習の努力の成果が生かしくいか、教師が日常観察した

子どもの学習態度等の平常点が成績の中にあはわれにくいという欠点が問題視されている。各学校の回答中にも最近10段階にかえたというものがかなりあった。理由として高校入試の調査書作成にも影響された面もあると考えられるが、大多数は10段階にすることによって、生徒の成績の異動、変化が比較的表わしやすく、生徒の努力の成果が5段階より表わしやすいということである。本校生徒、父兄対象の調査によっても10段階評価の賛成が多い。(生徒65%, 父兄72%)

(2) 技能教科の評価のくふう

10段階評価は賛成者が多いが、生徒の一部に評価に対する不信感もある。本校生徒の調査によると、学習評価と自分の予想とだいぶちがうという意見が20~30%あること、とくに、いわゆる技能教科と言われる音楽・美術・技術家庭・保健体育に対する不満がある。事前に評定基準を生徒に周知させることの重要なことはもちろんであるが、周知させたとしてもなお問題が残るようである。技能教科で10段階評価する場合、4の段階と5の段階との差は、どこにどれだけの差があるであろうか。なかなかむずかしい問題である。技能教科の評価を10段階評価と技能だけの評価

としてABCを併記している学校が2校あったが、この問題の打開の一方向として注目される。

(3) 相対評価と絶対評価の問題

段階評価で父兄に連絡することはしないという学校がある。教科ごとに偏差値を求め、換算点を算出し連絡するというものである。また、各段階に人数制限をしないで弾力的に評価するという学校、相対評価によって他人と比較しての優劣を知らせるのでなく、本人に努力すべき点を知ってもらって意欲的に学習させようとくふうしている学校等あり、相対評価と絶対評価の長所・短所を考えて、どちらかに主体をおきながらその欠陥を補う努力を払っていることが察せられる。

3 学習所見の項目（観点）と記入回数

(1) 学習所見

ア 指導要録の観点と同じもの	26校
イ 独自の観点によるもの	7校
ウ 文章表現のもの（全教科の総合所見）	13校
エ なし	7校

(2) 学習所見記入の回数

ア 各学期ごとに記入（3回）	41校
イ 3学期に記入（1回）	5校

大多数の学校では指導要録の観点と同一の観点の所見欄を設け、各学期ごとに記入するようになっている。所見欄があっても1学期は生徒の実態は握不じゅうぶんと理由で記入しない傾向が多分にあり、また、記入したとしても著しい傾向があった生徒にのみ記入し、全員に記入することが少ないのではないかと考えられる。少数の学校であるが観点に改善を加え、父兄、生徒に理解しやすい表現にしたり、教科で特に重点をおく点について観点を設定するとか、その学校の年度の努力事項を分析した観点をあげているところ、学習への参加、予習復習の項目等独自の判断でくふうがこらされている。本校の生徒の要望にも「自分の学習の目あてになるように、自分の優れている点努力すべき点を明示してほしい」というのが多かったこと、また、父兄の要望として、「子どもに自信をもたせ、学習意欲をおこさせるように考えてほしい」ということから考えても、学習所見の観点（項目）は各学校で指導要録の項目にとらわれずに研究改善していくことが必要であろう。

全教科の総合所見として文章表現であらわす学校が13校あるが、学習への取り組み、家庭学習のようす、提出物等の一般の事項を、特に学級主任から見た傾向が記述されがちになるのではなからうか。しかし、この問題も前述したPTAのあり方、日常の学習指導、生徒指導等とのかわりあいでは否かを判断しなければならないことは言うまでもない。

4 行動、性格の記録欄

- | | | |
|-----------------|----------------|-----|
| (1) 文章表現で自由記述 | ・各学期ごとに記入…………… | 21校 |
| (2) 文章表現で自由記述 | ・学年末に記入…………… | 3校 |
| (3) 指導要録の13項目で | ・各学期ごとに記入…………… | 1校 |
| (4) 学習、行動の総合所見で | ・各学期ごとに記入…………… | 18校 |
| (5) 学校独自の観点を設けて | ・各学期ごとに記入…………… | 7校 |
| (6) 行動、性格の記録欄なし | ・…………… | 4校 |

(5)の独自の観定の例

- ア A校の例……・ことはづかいは正しいか ・みなりは正しいか ・時間をたいせつにするか ・集団行動へ参加するかなど
- イ B校の例……・係としての仕事はどうか ・清掃や作業態度はどうか ・ことはづかひやあいさつはどうかなど
- ウ C校の例……・正しい服装 ・時間を守る ・衛生に留意する ・忘れ物はないか ・正しいことはづかひなど

指導要録の13項目では抽象的であり、父兄、生徒にとっては具体的にどんなところがよく、どこを指導したり、注意したらよいか理解できないうらみがある。文章表現による自由記述はもっとも伸縮自在で意のあるところをその生徒に即して記述できる利点があるが、実際問題として学期末の多忙の時期に意を尽くせるかどうか疑問も残る。

学校独自の観点での行動、性格の記録は一つの方角を示すものではなからうか。すなわち、その学校における生活行動の問題点や基本的行動様式に包含される内容を具体的な窓からの観点として設定したり、さらに範囲を拡大し特別教育活動の活動場面の観点を含めて評価することは、父兄の要望にもそい、生徒の行動目標ともなり得るのではなからうか。

13項目によってABCに評価すると「学習成績のすぐれた子どもが行動・性格の評価もよくなりやすい」(国立教育研究所)という欠陥が指摘されているが、行動・性格の評価は指導要録・通知票いずれに記録するとしても今後研究していく必要があると思われる。

記入回数として学年末に1回という学校が3校ある。1学期・2学期には生徒の行動・性格をじゅうぶんは握できないという理由からと思われるが、具体的場面をとらえての観点を設定した場合学年末1回ということにはならないであろう。

5 特別教育活動の記録

- | | |
|---|-----|
| (1) 学級・生徒会・クラブ活動における所属名、役員名を記入する。…………… | 19校 |
| (2) 学級・生徒会・クラブ活動における所属名、役員名と活動状況を記入する。… | 12校 |
| (3) 特別教育活動の記録欄なし。…………… | 23校 |

特別教育活動欄のない学校が多いが、その理由として生徒、父兄ともに承知しているのだから記

入の必要はないと判断したものと考えられる。

所属名、役員名のみを記入する場合は記入しないのと大差がないように考えられる。しかし、特別教育活動欄に所属名、役員名を記入し、行動・性格欄にその活動状況を記入している学校も見られたが、これはむしろ(2)に該当する。

特別教育活動は、教師と生徒および生徒相互の人間的な接触の場であること、友人と協力して豊かな共同生活を築く態度を育てたり、集団の向上発展に尽くす能力を養えること、余暇を善用したり、能力・適性の発見と伸長の場であること等々を考えた場合、この欄の内容・表記方法は今後研究くふうの必要があると考える。本校の調査結果でも「特別教育活動欄をもっと詳しく記入してほしい」というのが父兄……62%、生徒……64%あった。くふうの方向として観点を設定するのも一つの方法ではなかろうか。

6 通知票と定期考査の素点通知

通知票と定期考査の素点通知を別葉としているもの12校、同一用紙で作成しているもの16校素点通知をしているかどうか不明25校であった。両者を同一用紙で作成している場合、考査の素点即通知票の評価という誤解をさけるよう特別の手だてを講じておかなければならないであろう。

あとがき

1. この調査研究は送付された通知票を手がかりとしてまとめたもので、各学校の実情を考慮しないものである。そのため内容不じゅうぶんであったり、各学校の意に反する記述があるかも知れないがご容赦願いたい。

2. 通知票を「最近改善した」という学校が予想以上にあったが、改善の方向として三つ考えられる。

(1) 生徒の学習・行動の目標になるように配慮した。

(2) 学校教育目標達成方策の一環として改善した。

とかく父兄は学習記録を重視しがちであるが、今後の通知票改善の方向として、望ましい人間像を目ざして、行動・性格の記録の重視、進路特性の発見、助長、能力開発という面に重点をおいて研究の要があると思われる。